

カナダの継承日本語における言語接触による変化の調査
 ASSESSING CONTACT-INDUCED CHANGE IN HERITAGE JAPANESE
 IN CANADA

善積祐希子, レスブリッジ大学
 Yukiko Yoshizumi, University of Lethbridge

1. はじめに

複数の言語が接触している環境において、そのうちの一言語が継承語または少数言語である場合、言語変化は避けられない (Bynon 1977)。本研究は、社会言語学バリエーション (変異) 理論の枠組で、カナダで話されている継承日本語における構造的な言語変化の有無を調査した。本研究で用いる継承語話者とは、カナダで用いられる定義に沿っており、第一言語が英語やフランス語または先住民の言語以外の言語を話す者のことである (Harrison 2000; Cummins 2005)。そのため、継承日本語は、必ずしもカナダで生まれ育った子供たちが話す日本語であるとは限らず、本研究の調査対象である継承日本語話者 (日英バイリンガル話者) は成人である。

構造的に似ている言語間で接触がある場合、言語変化が起こりやすいと報告されている (Johanson 2002; Winford 2003; Bullock and Toribio 2004)。一方、類型論的に異なる言語間では、言語収束現象は起こりにくく、つまり、継承日本語と英語の二言語が接触している場合、構造的な言語変化は起こりにくいと考えられる。そこで、本研究は目的語の助詞のバリエーション (付与または省略) に注目し、日常会話データを科学的に分析することで、カナダの継承日本語が英語と接触した結果、日本語に英語の影響による構造的な言語変化が起きているのかどうかを調査した。

2. 研究方法と使用データ

2.1 研究方法

本研究は、社会言語学バリエーション理論に基づいた比較法 (Comparative Method) を用いた。日英言語接触による日本語の構造的な言語変化を見るために、まず日本語と英語間に見られる構造的そして計量的に異なる部分を特定した。それが格助詞の付与システムである。例 (1) に見られるように、日本語の名詞は、格助詞の付与によって統語情報が表される。しかし、例 (2) で見られるように、日常会話では、これらの格助詞はしばしば省略され、格助詞の付与と省略のバリエーションが存在する。

(1) ほれで 軍隊が ぼちぼちね、頭角を 現してきた。 (CJECC/017a/203)

(2) よくその人-がね、ちっちゃな犬-を連れて散歩してた。 (CJECC/010/281)

一方、英語には格付与のシステムはない。本研究では、英語による日本語への影響を考察するために、目的語の位置の名詞の格助詞に注目した。先行研究によると、格付与システムは英語との接触により変化を受けやすい部分であり、米国で話されている継承語で格付与の単純化や喪失が報告されている (Huffines 1989; Larmouth 1974; Preston 1986 他)。仮説として、英語との継続的な言語接触により、カナダの継承日本語においても同じように格付与システムの単純化や衰退が見られるかもしれない。

2.2 使用データ

社会言語学インタビュー (Sociolinguistic interview, Labov 1984) の手法を用い、カナダ (オタワとトロント) 在住の日本語と英語のバイリンガル話者の自然発話を録音した。そして本研究のために、カナダ在住歴と性別をもとに 16 人を選択した (表 1 参照)。カナダ在住歴を考慮した理由は、英語との接触期間の影響を見るためである。また、英語能力に関しては、仕事や家庭で日常的に日本語と英語の両方を使用し、高い英語能力を必要とされている話者を対象にした。これらの日英バイリンガル話者 (継承日本語話者) は、日本で生まれ育ち、カナダに移住してくる前に日本語を習得した日本語母語話者である。

継承日本語における英語との接触による影響の有無を探るには、継承日本語だけを見ても判断できない。そこで、英語と言語接触をしていないベンチマークとしての日本語、つまり日本で話されている日本語 (祖国日本語) と比較した。同じように社会言語学インタビューの手法を用いた **Corpus of Kwansai Spoken Japanese** (Heffernan 2012) より、年齢、性別、そして英語能力がないという自己評価をもとに、16 人の話者を選択し、祖国日本語データとして用いた。

継承日本語話者				祖国日本語話者			
カナダ在住歴	男	女	計	年齢	男	女	計
14～30 年	4	4	8	30～49 歳	4	4	8
31～50 年	4	4	8	50～79 歳	4	4	8
計	8	8	16	計	8	8	16

2.3 分析手順

各話者より、目的語の位置に現れる名詞を 25 個まで抽出した。継承日本語から合計 381 個、祖国日本語から合計 386 個の名詞を抽出した。話者が格助詞を付与したり省略したりする際、言語外要因 (社会的要因) と言語内要因が大きく関係していると考えられるため、抽出されたすべての名詞は、話者のカナダ在住歴、年齢や性別の言語外要因と、先行研究で格助詞の省略に影響を及ぼすと報告されている言語内要因によって、コーディングを行った。言語内要因は、取立て助詞

の有無、目的語と述語の隣接性、終助詞の有無、そして節のタイプ（主節または従属節）の4つである。

3. 結果

3.1 目的語の格助詞の省略の出現率

祖国日本語では、全体の53%の名詞の格助詞が省略されることがわかった。一方、継承日本語では、46%の名詞の格助詞が省略された。もし英語の影響があるのであれば、格助詞付与のシステムがない英語と同じように、継承日本語でも格助詞の省略が100%またはそれに近い頻度で省略されるべきである。しかしながら、継承日本語の格助詞の省略の出現率は、英語とは異なり、むしろ祖国日本語に近いことが観察された。

3.2 変異分析結果

格助詞の省略の出現率を見ると、継承日本語における英語の影響は観察されず、むしろ祖国日本語の出現率のほうに近い。しかし、格助詞の付与と省略をコントロールしている基底の文法を見なければ、継承日本語と祖国日本語間の本質的な相違点を議論することはできない。そこで、言語外要因と言語内要因がどのように「格助詞の付与か省略か」という話者の選択に影響を及ぼしているのかを検証するために、変異分析を行った。そしてそれぞれの分析結果から得られた基底の文法を比較することで、継承日本語と祖国日本語間の相違点を考察した。

3.2.1 言語外要因

祖国日本語では、話者の年齢差が統計上有意（ p -value 0.05 以上）であり、若い年齢層の話者の間で、格助詞の省略が促進されていることがわかった。また、女性のほうが助詞を省略する傾向があるが、性別は統計上有意な要因ではない。一方、継承日本語では、カナダ在住歴も性別も、統計上有意ではないが、在住歴の長い話者グループのほうが格助詞の省略を好む傾向が見られ、また女性のほうが格助詞を省略することが多いようだ。しかし、全体的に見ると、継承日本語では格助詞の省略を強く促進している言語外要因はない。

3.2.3 言語内要因

祖国日本語では、取立て助詞の有無が格助詞の省略にもっとも強い影響を及ぼしており、名詞が取立て助詞とともに現れる場合、格助詞の省略が促進される。二番目に強い影響を及ぼす要因は、目的語と述語の隣接性であり、目的語のすぐ後に述語が来る場合、格助詞の省略が促進される。終助詞の有無と節のタイプの影響は、統計上有意ではない。

継承日本語でも、取立て助詞の有無が格助詞の省略にもっとも強い影響を及ぼしていることがわかった。祖国日本語と同じように、取立て助詞がある場合、格助詞の省略が促進される。次に強い影響を持つ要因は、目的語と述語の隣接性であり、目的語と述語が直接隣接している場合、格助詞の省略が促進される。そして、終助詞の有無と節のタイプは、統計上有意である要因ではない。

3.3 考察

継承日本語と祖国日本語の基底の文法を比較すると、目的語の位置にくる名詞の格助詞の省略に関して、どちらの日本語にも取立て助詞の有無と、目的語と述語の隣接性という制約があることがわかった。つまり、継承日本語と祖国日本語は、とてもよく似た基底の文法を共有している。このことより、カナダで話されている継承日本語は、現地語である英語と継続的な言語接触にあるにも関わらず、祖国日本語と同じ基底の文法を持っており、構造的な言語変化が生じていないと考えられる。

4. まとめ

先行研究では、現地語と言語接触中の継承語では言語変化が起こりやすいこと、そして、実際に英語の影響により継承語の格システムの衰退が報告されているが、カナダで話されている継承日本語に関しては、英語との言語接触による構造的な言語変化を示す確固たる証拠は得られなかった。一般的に、継承語に見られる言語的規則性が規範文法から逸脱している場合、それは現地語による影響だとみなされることが多い。しかし、本研究は、科学的な分析方法を用いて、規範文法からの逸脱が必ずしも現地語の影響によるものだと限らず、祖国の言語にも本質的に存在するものだという事も示すことができた。

しかし、継承日本語に英語の影響が全くないというわけではなく、本研究で目的語における格助詞の付与と省略のバリエーションに注目した範囲では、英語との接触による構造的な変化は観察されなかったということである。そのため、今後もさらに日本語に観察されるバリエーションについて研究し、カナダの継承日本語について理解を深めていきたい。

参考文献

- Bullock, Barbara E. & Toribio, Jacqueline A. 2004. Convergence as an emergent property in bilingual speech. *Bilingualism: Language and Cognition* 7(2): 91-93.
- Bynon, Theodora. 1977. *Historical Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cummins, Jim. 2005. A proposal for action: strategies for recognizing heritage language competence as a learning resource within the mainstream classroom. *Modern Language Journal* 89: 585-592.
- Harrison, Brian. 2000. *Passing on the Language: Heritage Language Diversity in Canada*. <http://www.statcan.gc.ca/pub/11-008-x/2000002/article/5165-eng.pdf>
- Heffernan, Kevin. 2012. An introduction to the Corpus of Kansai Spoken Japanese. *Journal of Policy Studies* 41: 157-164.
- Huffines, Marion L. 1989. Case usage among the Pennsylvania German sectarians and nonsectarians. In N. C. Dorian (ed.), *Investigating Obsolescence Studies in Language Contraction and Death*. Cambridge: Cambridge University Press. 211-226.
- Johanson, Lars. 2002. *Structural Factors in Turkic Language Contact*. Richmond: Curzon Press.
- Labov, William. 1984. Field methods of the project on linguistic change and variation. In J. Baugh & J. Sherzer (eds.), *Language in Use: Readings in Sociolinguistics*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall. 28-53.

- Larmouth, Donald W. 1974. Differential interference in American Finnish cases. *Language* 50: 356-366.
- Preston, Dennis R. 1986. The case of American Polish. In D. Kastovsky & A. Szwedek (eds.), *Linguistics across Historical and Geographical Boundaries*. In Honour of Jacek Fisiak on the Occasion of his Fiftieth Birthday. Vol. 2. Berlin: Mouton de Gruyter. 1015-23.
- Winford, Donald. 2003. *An Introduction to Contact Linguistics*. Malden: Blackwell.